

死 生 学

DALS ニュースレター No.25

東京大学 グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」
Development and Systematization of Death And Life Studies



第15回日本臨床死生学会大会 p.4

■巻頭エッセイ

渡辺 裕 上別府 圭子

■イベント報告

第15回日本臨床死生学会大会

テーマ： 臨床現場で生きる／活かす死生学

公開講演会：青木新門氏

「いのちのバトンタッチ——

映画『おくりびと』によせて」

The 4th BESETO Conference of Philosophy

日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」

他

■書評



公開講演会：青木新門氏 p.5



日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」 p.12

エッセイ フォーレの《レクイエム》と「天国」の表象

渡辺 裕 (人文社会系研究科教授 美学)

だいぶ前のことだが、たまたま見ていたテレビドラマで、突然フォーレの《レクイエム》が流れしてきたことがある。《SP 警察庁警備部警護課第四係》という警察もののドラマで、《レクイエム》という宗教曲にはおよそそぐわなないシチュエーションにも思えた。

フォーレの《レクイエム》は、モーツァルト、ヴェルディら、あまたある大作曲家の《レクイエム》の中でも、とりわけ清純な美しさをたたえた曲である。ドロドロした現世の対極にある彼岸の世界のイメージは「天国的」などと呼ばれ、独特の人気がある。そういう感覚からすると、たとえば人が死んだ場面であれ、首相の命を狙う犯罪者と警護にあたるSPが派手な銃撃戦を演じ、その首相も実はダーティな存在だったというような、このドラマのストーリー（うろ覚えだが）には似つかわしくない曲にも思える。

調べてみると、フォーレの《レクイエム》を使った映画は相当数多い。この《SP》というドラマの監督を務めていた本広克行監督（彼はどうやら「クラシック・オタク」らしい）自身、すでに映画《スペーストラベラーズ》(2000)でやはりこの曲を使っているが、邦画では他に《Wの悲劇》(1984)、《霧の子午線》(1996)に出てくる。洋画にまで話を広げれば、ゴダールの《パッション》(1982)をはじめ、《ロード・オブ・イリュージョン》(1995)、《シン・レッド・ライン》(1998)、《バガー・ヴァンスの伝説》(2000)、《シモーヌ》(2002)など、枚挙に暇がない（たぶんもっとあるだろう）。

それぞれの作品での使い方は様々だが、《レクイエム》は、カトリックにおける死者を追悼するミサという明瞭なコンテキストを伴っている曲であるにもかかわらず、必ずしも「死」と関わらない、また宗教的でもない使い方がされていることが結構多い。《バガー・ヴァンスの伝説》は、謎のキャディが、自暴自棄になっていたゴルファーを蘇らせる話だが、このゴルファーのショットが奇跡的にカップに吸い込まれ、ホールインワンになる場面で、スローモーションのような球の動きの伴奏に、終曲の「楽園にて (In Paradisum)」が用いられる。CGで完全無欠の女優を作り上げて大ヒットさせた映画監督が、その女優に振り回されるさまを描いた《シモーヌ》では、CGで作りあげ

られたこの女優が画面に映し出されて動く場面で、やはりこの音楽が流れる。

これらの使い方は《レクイエム》本来のあり方から外れてしまっているようにもみえるが、考えてみるとフォーレの《レクイエム》自体、カトリックの伝統からすれば決して「正統」ではなかった。元来《レクイエム》の中心部分だった、最後の審判の日の恐怖を描く「怒りの日 (Dies irae)」を削ってしまい、最後に「楽園にて」を付け加えるなど、ひたすら安息に満たされた天国的イメージを強調したこの作品には、1888年のパリ・マドレーヌ教会での初演の際に司祭たちから激しい批判が出たという。その後この曲は、フル・オーケストラ版に書き換えられて1900年のパリ万博で上演され、さらなる「世俗化」とともに広まってゆく。この曲の天国的イメージもまた、こうした「世俗化」の過程の中で形作られてきた。その背景には、宗教や死のイメージ自体が教会を離れて世俗化・個人化の道をたどった、この時代全体の状況がある。

その意味では、宗教とかけ離れたところにあるかにみえる、最近の映画の中での使われ方も、イメージ的なつながりのレベルで考えれば、さほど外れているというわけでもななかり。この曲の使われるコンテキストは様々だが、多くの場合、一瞬間が止まるようなスローモーション的な動きや、この世のものとも思われなような状況がかかわっており、この音楽はそういう異次元の世界に見る者を引き込む力をもっている。その力の源は、《レクイエム》として積み上げてきた「天国」の表象にあると言って良い。

他方で、この曲が様々なコンテキストで使い続けられることは、それらの映画の多様なイメージをインターテクスチュアルに重層化させてゆき、それはまた、宗教的な「天国」イメージ自体にも別の厚みを与えてゆくことになるだろう。宗教的心性が失われているようにみえる今日の状況はまた、マルチメディア環境の中で、それがこれまでにない広がりをもちつつ新たに立ち現れてくる状況でもある。フォーレの《レクイエム》の事例はそのことをあらためて感じさせてくれる。

エッセイ 救われた命

上別府 圭子（大学院医学系研究科准教授 家族看護学）

小説『幽霊人命救助隊』（高野和明著）を読んだ。自殺した四人組が奇妙な神様から課題を与えられる。四十九日の間に、この世の自殺志願者、百人の命を救え、そうすれば天国に行かせてやろうというのだ。早速彼らはこの世に降り立った。彼らには特殊なゴーグルが与えられていて、それを通して見ると、信号のように青黄赤の色別と映像のぶれによって自殺のリスクの高さが見分けられる。最もリスクが高い人は赤く、身体の輪郭がぼやけるくらい大揺れしているというわけだ。四人組はさまざまな重圧から自殺を志願している街の人々をひとりひとり救ううちに、病院に通院・入院している人々の中にも、自殺志願者がいることに気づくようになった。

病棟で赤信号のおばあさんを発見した。一人がおばあさんの身体の中に入り込んでおばあさんの心身の感覚をモニターしてみると、腹部から腰部にかけて物凄い痛みが走っていた。おばあさんは末期のガン性疼痛に苦しんでいたのだ。さらに自分のせいで子供たちにお金の負担をかけていることも知っていた。寂しい気持ちもあったが誰も恨まず、ありがとう、さようならと念じながら、点滴のチューブを引き抜こうとしていた。ここで四人組は、寿命を迎えるまでは何とか助けなければいけない、これ以上苦しませずにこのまま逝かせてやろう、こんないい人をたった一人で死なせてはいけないなどと、病院の個室で人知れず死のうとしているおばあさんを囲んで進退窮まった。おばあさんの手がチューブに伸びた。四人組の一人がおばあさんの耳元にかがみ込み、涙をこらえながら語りかけた。「おばあちゃん……辛いだろけど、もう少しだけ生きて……お願い……お医者さんに頼めば、痛みをとってもらえるかも。」おばあさんの手の動きが止まった。このとき赤信号は黄色から青色へと変わり、ぶれも消えて危機的状況から脱していた。おばあさんの顔がみるみる安らかになっていった。おばあさんは亡くなった。四人組は泣いた。魂が肉体を離れ四人組の中心に立ったおばあさんの姿は、安らぎに満ち瞳はなごみ口元には微笑をたたえていた。おばあさんは土壇場で死の誘惑から解放され、自分の命を全うした。娘と孫が見舞いに来ておばあさんの異変に気づく姿を、おばあさんの魂は愛情のこもった眼差しで見つめていた。

臨床でお会いしたAさんを思い出す。Aさんは営業マンとして活躍していた紳士であったが、六十歳間近になって食道癌が発見された。本人の希望と外科の意見が一致して放射線療法と化学療法の併用療法を受け、一旦は著明改善をみたが、間もなく食道癌の再燃を認め、一途増悪の道をたどった。この経過中、食道及び気管の狭窄があるために、喀痰の喀出が困難であり、不眠を訴えていた。その頃から『尊厳死』の希望を表出していたが、呼吸苦が生じると、「死なせてくれ」「ロープを持ってこい」などと不穏な言動も示すようになった。ステントの挿入も効果なく、気管への直接浸潤による強い気管狭窄を認めるに至ったので、生命予後延長のためには気管切開・挿管による呼吸管理が必要であった。主治医がAさんに希望を問うたところ、機械的な延命処置は望まないということであった。Aさんの個室には、いつも内縁の奥さんが静かに付き添っていた。Aさんは離別した奥さんとの間に一男一女をもうけていたが、娘さんとは音信不通に近い状態にあった。闘病期間中に一度だけ面会があったが、姿を一目見るだけ見せるだけの面会だった。看護師がシャワー浴介助をして背中を流していると、Aさんは「娘みたいで嬉しいな」とつぶやき、にっこり微笑んだ。その翌々朝、心拍数が低下し、そのまま亡くなった。食道癌の発見から九ヶ月間の経過だった。

Aさんや小説の中のおばあさんのように、終末期の方の中にも「死にたい」ともらす方がある。死を目前にした方の心理を数行で記述できるとは思っていないが、疼痛や呼吸苦、死への恐怖や孤独感から解放されたいと望む心理があるだろう。「死にたくない」という叫びも同時に聞こえてくる、さらには個々の人生のさまざまなしこりや悔いも思い返されるかも知れない。疼痛や呼吸苦の緩和は、第一にはかられなければならない。一方、家族関係上の苦痛の緩和は専門の範囲外と考える医療従事者も多いように思えるが、Aさんやおばあさんのケースは、普段の看護ケアが家族像を修復する可能性のあることを教えてくれる。

ところで四人組は百人の救命に成功した。重いテーマだが何も押しつけてこないおもしろい小説だった。

報告

第15回日本臨床死生学会大会

テーマ：臨床現場で生きる／活かす死生学

清水 哲郎（人文社会系研究科上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学）

2009年12月5日（土）～6日（日）の二日間、日本臨床死生学会の第15回大会を東京大学本郷キャンパス（メイン会場安田講堂）にて開催した。これはグローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」が直接主催したものではないが、その全面的な支援を得て行ったものである。すなわち、本大会一日目のプログラム終了後に、同じ会場でグローバルCOE主催の公開講演会（別に報告あり）を、大会参加者へのプレゼントのようなかたちで行っていただいた。また二日目には、本大会と平行して、招聘した外国人研究者・実践家3名による、3つのワークショップをグローバルCOEのリカレント教育（医療・介護従事者のための死生学基礎コース）として行ったため（別に報告あり）、その3名の外国人研究者・実践家に大会のほうでも講演をしていただくことができた。また、講演やシンポジウムにグローバルCOEの事業推進担当者の皆様数名に登壇していただいたし、数名のグローバルCOE特任研究員に、開催に至るまでのほぼ10ヶ月に亘って大会の準備に携わっていただき、大会期間中はさらに多くの研究員等に手伝っていただくなど、人的な支援も非常に大きいものであった。このように本大会はグローバルCOEの支援があっはじめて実施することができたことを振り返り、改めてここに感謝を申し上げる次第である。もちろん、このような支援を通して、臨床死生学に深い関心をもつ参加者に、本グローバルCOEの活動とその成果をアピールすることができたことも事実である。

本大会は成功裡に終わることができた。このことは、次のような数字を挙げれば明らかであろう。大会参加者数（参加費を支払った人）は793名（事前登録362名、当日受け付け431名）であり、これに招待者・登壇者とスタッフを加え



ると、約860名/日となる。さらに、青木新門氏による公開講演時には参加者は1050名程度にもなった。参加者は、医療・介護にいろいろな仕方携わっておられる方が目立ち、これだけの方たちに参加いただいたことから、死生学が提供する実践的な知へのケア現場のニーズと、本大会が提供するものへの期待の強さを感じた次第である。

本大会は、「臨床死生学会」の大会であるということから、グローバルCOEの活動と大会を結びつけるべく、テーマを「臨床現場で生きる／活かす死生学」とした。死生学の実践知が現場で生きている様子を顕にし、また、死生学の諸研究を臨床現場によりよく活かすための今後の方向性を見定めたいという趣旨であった。ことに、自らの実存が脅かされる仕方では人が死生を切実に意識すると思われる喪失体験、また、親しい者に先立たれる死別という喪失の悲嘆をめぐって議論を深めたいと考えたが、実際に講演（別に報告あり）やシンポジウムは企画側の期待以上に充実した内容のものとなった。例えばシンポジウム第一（別に報告あり）は死別の悲嘆をめぐって、シンポジウム第二（別に報告あり）は、厳しい疾患に罹った方たちの生をめぐって、喪失の只中にある方たちを理解すること、寄り添うことについて、多面的な検討をすることができた。加えて、一般発表会場にも多くの方が集まり、同様のテーマおよびより広く臨床死生学のさまざまな面にわたって発表がなされ、活発な議論が交わされた。

最後に、同大会開催を通じて、本グローバルCOEの臨床現場への関わり方について、方向性を確認することができた。一つには、「医療・介護従事者のための死生学」というリカレント教育が現場のニーズに相応していること、また、これをより充実したものとする必要があることの確認である。また、一つには、事業推進担当者の多くの方は日頃は臨床現場とは縁遠いところで研究を進めておられるわけであるが、そういう方たちのもっておられる研究成果が、臨床現場の問題意識と響きあう可能性であり、重要性である。本グローバルCOEの残りの二年間を通して、こうした方向を少しでも推進して行きたいと考えている。

報告

公開講演会：青木新門氏

「いのちのバトンタッチ——映画『おくりびと』によせて」

島 蘭 進 (本COE拠点リーダー 人文社会系研究科教授 宗教学)

2009年、12月5日、6日の両日、東大安田行動と文学部の大教室を会場として行われた第15回日本臨床死生学会大会は、グローバルCOE「死生学の構築と組織化」にとってもきわめて有意義な集いだった。その中で、グローバルCOE「死生学の構築と組織化」の主催行事として行われたのが、12月5日、16時20分から18時まで、安田講堂を会場とする青木新門氏の公開講演会だった。

第81回アカデミー賞外国映画賞を受賞した映画『おくりびと』(2008年)は、青木新門氏の小説、『納棺夫日記』を下敷きにした作品だった。現代の若者が死者との別れの儀礼を自らの職業とする道をたどり、人間にとっての死生の意義を問い直しながら、その仕事に深い生きがいを見出すようになる過程を描いたこの作品が世界各地で歓迎されたことは、現代人の死生観を考え、また日本の死生の文化を考え直す上で、さまざまなヒントを提供してくれる。

青木氏は『おくりびと』の企画者であり主演者である俳優の本木雅弘氏が、『納棺夫日記』に感銘を受け、著者である青木氏との面会を求めてきた経緯や、映画化に際して、脚本に納得できずに原作者としてのクレジットを拒否した経緯についてユーモアを交えて披露した後、青木氏自身の生涯や死生観に関わるようなさまざまなエピソードを取り上げながら、「納棺夫」という仕事に携わった理由や『納棺夫日記』という作品が生まれるに至ったわけ、さらには現代日本における死生の文化の衰弱という問題などについて語っていった。1時間半余りの時間を短く感じるような豊かな講演で、安田講堂をほぼ満席にした多くの聴衆は感動とともに青木氏の語りに耳を傾けていた。

死生学的な観点からも多くの注目すべき内容が含まれていた。『おくりびと』では、一般の葬儀社とは別に死者のみづくろいと納棺を主たる業務とする業者がいるかのような設定となっている。そもそも死者の身づくろいは家族や親類縁者が「湯灌」として行うものだった。早稲田大学を中退した青木氏が帰郷した当時の富山県では、まだ家族親族による湯灌が行われていた。もちろんそれ以前は家族親族による湯灌が当然だったのだが、やがて事情が変わってくる。文学に心を寄せながらスナックを開店し、経営に失敗した青木氏が、葬儀社に仕事を得た頃はそろそろ湯灌を業者

に委託する傾向が出始めていた。そこで、青木氏は葬儀社で湯灌や納棺の業務をとくに委ねられることになったのだった。

『おくりびと』ではオーケストラのチェロ奏者だった「大悟」が「納棺師」となるのだが、「納棺夫」や「納棺師」という職種が広く存在しているわけではない。だが、葬儀社の業務が「死の穢れ」に関わる側面をよく示す職名ということになる。大悟の妻の「美香」は大悟が納棺師として働いていることを知ると、「汚らしい」という言葉を残して実家に帰ってしまう。これは『納棺夫日記』で「穢らしい、近づかないで」と妻に拒まれた箇所の記述とぴったり符合している。死をタブー視する眼差しをいかに克服するかが、青木にとって重大な問題だった。だが、腐乱した死体を処理しなければならず、蛆をかき集めているうちに、一匹一匹の蛆の行動が鮮明に目に焼きつき、蛆たちの生命の息吹に気づき、蛆たちが光って見えるというような経験を重ねていく。

青木氏の迫真の語りにも引き込まれているうちに、現代人が死を遠ざけてきたことは確かだとしても、多くの人々がそのことを強く自覚し、死を身近なものとして再認識することを望んでいるのも、また事実ではないかと思えてくる。最後に青木氏は、親子兄弟など親しい人の死に目に立ち会うことの意義を強調した。「いのちのバトンタッチ」という題には、その主張が含まれている。死の場面に身体的直接性をもって立ち会うことが、「よりよく生きたい」という意志を奮い起こす——青木氏のそうした信念が聴衆の心を揺さぶった。



報告

臨床死生学会講演と

《医療・介護従事者のための死生学》セミナー

ライアン・ワルド／松本 聡子／伊藤由希子

講演1 島蘭進教授「死生学の臨床現場への寄与」、
講演2 ドナ・シャーマン氏 “Understanding and
Responding to the Dying and the Bereaved”

2009年12月5日（土曜日）の午前、第15回日本臨床死生学会大会の一部として、本郷キャンパスの安田講堂にて、本拠点のリーダーである島蘭進（東京大学大学院人文社会系研究科教授）と米国オレゴン州ポートランド市にあるダギーセンター（The Dougy Center for Grieving Children and Families <http://www.dougy.org>）のエグゼクティブ・ディレクターのドナ・シャーマン（Donna L. Schuurman, EdD., FT）博士による二つの講演が行われた（座長は山梨英和大学の若林一美氏）。講演のタイトルは“Understanding and Responding to the Dying and the Bereaved”という、きわめて刺激的なものであった。

まず、島蘭教授は欧米諸国の臨床現場におけるケアの歴史を紹介しつつ、「スピリチュアル・ケア」と「生命倫理」の面において、日本の臨床現場にも、こうした「役割を担いうる人材制度の配置」が期待されているが、欧米諸国とは違い、チャプレン制のようなものが一般的でないこと、そして「仏教系病院の弱体化」を指摘した上で、日本において特定の宗教に基づいた臨床的ケアを越えた日本的なケア制度への構築の必要性を強調した。こうした構築に当たって、島蘭教授は死生学の期待される役割について、1.「死生学の臨床現場への寄与の複合性」（医療・ケア従事者、死別当事者との交流・研鑽）、2.「基礎死生学的な寄与」（死生観をめぐる現代人のニーズをくみ上げながら、対話の場を構成していくこと。多様な立場による緊張関係をも直視しつつ、新たな死生の文化の形成・充実に寄与していく）。3.「臨床現場への近くでの関与、遠くからの関与、市民生活全般への関与」といったことを主唱した。このように、島蘭教授の主張は日本の臨床現場において新たな「ケア」の必要性和「死生学」の期待されるべき役割を改めて考えさせられるものであった。

島蘭教授に続き、シャーマン博士による公演が

行われた。シャーマン氏は長年、全米小児遺族のグリーフサポートに取り組んできた第一人者である。講演内容は、1982年に設立された「ダギーセンター」の概要的紹介と、そこで行われている臨床的カウンセリングプログラムに関する話であった。当センターは、全米における小児遺族のグリーフサポートの代表的な拠点の一つで、約2万人の子供たちに対してカウンセリングを行ってきた実績がある。こうした豊かな経験をもとに、シャーマン氏は日米における子どもに対するグリーフサポートの相違を比較しつつ（例えば、日本人の子どもは常に数学や科学の学力テストにおいて、アメリカの子どもをはるかに上回る成績を残しているのに対して、一方、デス・エデュケーションの普及という観点からみれば、日本の教育現場はアメリカのそれからすると随分立ち遅れているという事実）、臨床現場で働く専門家はいかに肉親を喪った子どもに接し、またいかなる理解とサポートを提供すべきなのかといった、貴重なテーマについてお話くださった。

その中で、シャーマン氏はセンターが基礎としているグリーフの「4つの基本原理」として、①「グリーフとは死や喪失に対する自然かつ健康な反応である」、②「個人個人には自らを癒す能力がある」、③「グリーフの持続時間とその強度は人によって異なるものであり、決して画一的ではない」、④「グリーフは波のようなものであり、一挙に消えてゆくようなものではない」の4つを提示した。また、現代社会は死という不可避な事実と直面せず、臨床現場で働く専門家は喪失者に対する十分なケアを提供していると思われぬのが現状であると語った。こうした事情を鑑みて、シャーマン氏は肉親を喪った子どもたちのために、グリーフサポートをより普及しなければならないと同時に、こうしたサポートは専門家による一方的なケアとなってはならず、死に対する異なる体験と様々な理解をもつ子どもたち一人一人の「声」を、真剣に聞くことが何よりも重要であることを強調した。

（ライアン・ワルド：特任研究員）

講演3 エリザベス・デイヴィス氏 “The Supportive Care Model - Helping the Caregivers”

講演3ではエリザベス・デイヴィス(Elizabeth Davies)氏により“The Supportive Care Model - Helping the Caregivers”と題する講演が行なわれた(座長は金城学院大学の柏木哲夫氏)。

「数をこなす」ことが重視される現在の医療制度の下では、患者およびその家族との人間的な関わりに時間と労力を費やすという行為が正当に評価されにくい。こうした現状に対して看護師が葛藤や不満を抱いていることおよび看護師としての労働には多くの身体的・精神的消耗が伴うことについて、緩和ケア病棟に務める看護師の実例を交えつつ言及した。そして、看護師が患者およびその家族に「思いやりを持って接する」という理念を抱いたままで働き続けることが困難である現実と、スピリチュアルなケアと思いやりが重要であるという事実を提示した。

最後に、通常は医療従事者が患者をケアするものとされているが、看護師が自分自身をケアし、また、看護師達同士でもケアしあうことの必要性について強調し、講演を締めくくった。

(松本 聡子：特任研究員)

講演4 トーマス・アティッグ氏 “Catching Our Breath in Grief”

講演4では、グリーフケアの研究者として著名なトーマス・アティッグ(Thomas Attig)氏が、その30余年にわたる研究から、愛する者との死別の悲しみを人がいかに引き受け、乗り越えていくのかについて講演した(座長は聖学院大学の平山正実氏)。

まず第一部「生命の息吹(The Breath of Life)」では、人の誕生や死の神秘性や神聖性、また、人は生きている間、内なる生(inner being)を生命や宇宙のリズムに合わせようとしていることなどを挙げながら、生命の息吹こそが人を生かしているという世界観・宇宙観を論じ、第二部「喪失により息も止まりそうなき(WHEN LOSS TAKES OUR BREATH AWAY)」では、愛する者を喪失すると、人はそのような調和や一体性、そして生きる気力を失うこと、第三部「息を整える(Catching Our Breath)」では、その悲しみに向き合い、世界と新たな関係を結び、離れていても死んだ人を愛することができるようになることで、人はふたたび生きる力を得るようになることと論じた。

壮大な世界観・宇宙観を背景にした、このような喪失の悲しみの克服過程が、日本を含めた他の文化におけるそれとどのように重なり、また異なるのかということも含め、きわめて興味深い講演であった。

(伊藤由希子：特任研究員)

喪失に関する3つのワークショップ

臨床死生学会大会の2日目に、本グローバルCOE主催による「喪失に関する3つのワークショップ」が、大会と並行して法文2号館の1番大教室で開催された。これは、2007年度より毎年実施している《医療・介護従事者のための死生学》セミナーの一環である。3つのワークショップの講師は、本大会でも講演をくださったドナ・シャーマン氏、エリザベス・デイヴィス氏、トーマス・アティッグ氏の3名であり、内容も講演と被るところが多いので、詳細は各講演の報告に譲る。

100名を超す参加者からは、「どの講師の先生も具体的であり、学会のテーマにも通じる“臨床に生きる”内容だった。臨床を身につけておくと、つい基本的なこと(とても重要なこと)を忘れがちで、改めなければならぬことが多く見つかった」など、好評を多数いただいた。しかし、同時に「“ワークショップ”としても、講義が続いてしまうのは残念です」など、もっと質疑応答や参加者同士の議論の時間が欲しかったとの意見もあり、今後のセミナー/ワークショップ開催において留意すべき点を確認させていただいた。

(山崎 浩司：上廣死生学講座講師)

シンポジウム1 遺された人々の思いに寄り添って

山崎 浩司（人文社会系研究科上廣死生学講座講師 死生学・医療社会学）

第15回日本臨床死生学会大会のシンポジウム2が、難病などによる身体・社会的喪失を本人が生きていることとそのケアの問題に照準したのに対し、このシンポジウム1は、遺された者の死別喪失とケアの問題に注目した（共同座長は早稲田大学の小野充一氏）。

最初の登壇者は、ルーテル学院大学附属人間成長とカウンセリング研究所の石井千賀子氏で、「子どもとともに遺された家族へのグリーフ・サポート」と題しての発表だった。石井氏は、20年におよぶ子どもへのグリーフ・サポートの経験の中から、祖母の急死を経験した9歳の男子のケースをとりあげた。おばあちゃん子だったこの男子およびその家族と3年間にわたってかかわるなかで、石井氏は死別経験を個人の問題としてとらえるのではなく、家族との関係の問題としてとらえること、そして死別者のライフステージを考慮することの重要性を再確認したという。これは、死別の辛さを身体症状・問題行動・一見心配ない様子など多様なかたちで表現する子どもに対して、石井氏が採用してきた家族療法的な取り組みが有効であることの証左なのだろう。

次の登壇者は、グリーフ・カウンセリング・センターの鈴木剛子氏で、発表のテーマは「構成主義の視点からグリーフ・ケアを考察する——死別喪失を成長の機会にするために」だった。構成主義的なグリーフ・セラピーは、昨年度に本グローバルCOEで招聘したロバート・ニーマイヤー氏の提唱するもので、グリーフ・ケア領域において多大な影響力をもつ。鈴木氏は、日本でその実践・普及に近年努めてきている。構成主義によれば、死別は人びとが個々に想定していた世界の崩壊と大切な人間関係の喪失を招くが、ここから十分に悲しみを噛みしめつつも、ナラティブによって人生の意味を再構成してゆくことで、人は死別悲嘆と向き合いながら生きてゆく力を獲得できるという。この意味再構成の過程で、死別者が何かポジティブな意味を1つでも見出せるよう支援をすることで、人間的な成長もあり得ると鈴木氏は語っていた。

3番目の登壇者である関西学院大学の藤井美和氏の発表「スピリチュアルペインと寄り添い」は、死別者の抱える痛みの中身とその痛みに寄り添うことの意味を問い直すものだった。死別

喪失に意味を見出そうとしたり、故人との関係性を構築していったりする作業は、自己・人間存在・いのちをどうとらえるのかという苦悩を伴う。藤井氏によれば、これがスピリチュアルペインであり、精神をもつ人間ならではの痛みである。そして、この痛みを抱える死別者に「寄り添う」とは、単にその者の傍らにいたりその者を理解しようとするのではなく、その死別者とともに自らも自己・人間存在・いのちを問い直してゆくことをいう。相手の抱えるスピリチュアルペインを丸ごと受け容れ、その痛みを完全には理解しきれないことの限界を認めながら、ともに自分自身を問い直してゆく存在であることが、死別者に寄り添う者のあり方なのではないか、と藤井氏は問いかけた。

最後の登壇者は本学の下田正弘氏で、専門であるインド哲学仏教学をベースに、「動かしがたき生死」と題する発表だった。氏によれば、遺された者の思いにどう寄り添うかという問いは、切実なものであるにしても、問う者自らもまた動かしがたき生死のうちにある存在であることを忘れさせ、死を三人称的にとらえる高みに押し上げてしまう危険性をもつ。従って重要なのは、万人にとって生死が動かしがたきものであるという気づきの地平にともに立つことであり、個という単位（個別の執着）を超えてどう生きてゆくのかを問うことである。仏教はその答えとして「無常」や「空」という概念を用意しており、人が個にとらわれずに他の個とつながり、加えて個を森羅万象のうち位置づけ、さらには究極的にいかなる本質も存在しないとの見地から、個を超えて集結してゆく意識（阿頼耶識）をもつに至る可能性を示唆している。こうした可能性に気づくことが、死別を含めた生死の苦しみからの解放への一歩だ、というのが下田氏の主張であると理解した。

以上のように、遺された人々の思いに寄り添うというテーマを、シンポジストには大変幅広く多様な見地から論じていただいたため、聴衆も自らの考えを様々にふりかえる機会を得られたのではないかと思う。時間の関係上、そうしたふりかえりをフロアとの議論をとおして分かち合うことができなかったのが残念だが、今後の臨床死生学会大会や本学グローバルCOEの行事において、そうした機会が設けられていけばと思う。

報告 シンポジウム2 「ケア現場における喪失と臨床倫理」

竹内 整一（人文社会系研究科教授 倫理学）

大会2日目、シンポジウム2「ケア現場における喪失と臨床倫理」は、2時過ぎから5時前まで安田講堂において開催された。死という、絶対的な喪失にいかに向かおうのかを、ケアする側・ケアされる側の双方向からの視点を意識的に顕在化させ、それらを交差させながら議論された。

まず、北海道医療大学の石垣靖子氏が「傍らに在ること―喪失、そして希望」と題して、人生の最期の時を生きている人たちが、それまでの日常のあたりまえの機能や営みを喪失していく苦悩と折り合いながらも、なお自分が自分である固有の感覚や物語を持ちうるかが、その人の「希望」となり「尊厳」ともなるとし、そうしたことを支える「傍らに在ること」自体の、素朴でもっとも基本的なケアのあり方について提題した。

続いて、獨協医科大学の高橋都氏が「「専門家」ではない医療者が喪失に向き合うとき」というテーマで、回復の可能性が少ない病や障害に対して、はたして医療者は「専門家」として介入することができるのか、そもそも喪失とは何らかの介入によって取り扱えるものなのか、という根本的な問いを踏まえつつ、なおそこで現場の医療者において可能な、また必要なケアのあり方とはどうあることなのか、を問うた。

続けて筆者が「「かなしみ」の倫理学」と題して、喪失における基本感情として「かなしみ」を原論的に取りあげ、「かなしみ」はそれを「かなしむ」ことにおいて、「みずから」の外なる他者や不可避の「おのずから」の働きと折り合いをつけ繋がっていくという開かれた可能性をもった「あわい（合はひ）」の感情であることを、

「いたい」「いたわ（ま）しい」「いたわる」という主観-倫理感情の展開と重ねて論じた。

最後に、日本ALS協会の橋本操氏が「17年目の終末期」という題で、自分は17年前のALS診断告知時の絶望から、今日まで何度か一般に言われる終末期を通過してきており、今も24時間人工呼吸器使用・全介助で命と暮らしを繋いでいるが、なお、単に受身になるのではなく、自分らしくありたい、主体的でありたいと考えており、同じような病にある患者や家族を励ます訪問活動を続けていると、ときにユーモアもまじえて報告した。

以上の4提題を受けて、ホームケアエキスパート協会の酒井忠昭氏、鳥取大学の安藤泰至氏が座長となって総合討論が行われた。討論では、1) 喪失という事態に向かい合うにおいて、どこまでが患者自身、医療介護者、また「神さま」の仕事なのか、2) そこでの表現とは何か、また、3) それを伝え理解することはどこまで可能か、といった問題、とりわけ、4) 橋本氏・石垣氏の提題された、人は回復の可能性が少ない病や障害においてもなお、その人らしい固有の主体を生きること、その意味で自分という「主役」を生きることが何より必要であり、そこに「尊厳」がある（―「時に痛みは人を貧しくさせることもあるが、痛みを知りそれを克服することにおいて、その人の、人であることの存在意義があるのかもしれない」橋本操氏）が、それを場としてどう保証しうるのか、といった問題などが活潑に議論された。



報告

The 4th BESETO Conference of Philosophy

一ノ瀬 正樹 (人文社会系研究科教授 哲学)

去る2010年1月7日・8日の二日間にわたって、韓国ソウル大学にて「第4回BESETO哲学会議」(The 4th BESETO Conference of Philosophy)が「東アジアにおける哲学の未来」(The Future of Philosophy in East Asia)というサブタイトルのもと、開催された。以前にもこのニューズレターで報告したことがあるが、「BESETO」とは、「北京」(BEijing)、「ソウル」(SEoul)、「東京」(TOkyo)の三都市の頭文字二つを取って並べたもので、本学では、北京大学、ソウル大学、東京大学の三大学のアカデミックな協調態勢を意味する。「BESETO哲学会議」は、こうした「BESETO」の理念のもと、三大学の、哲学を中心とする人文系の教員や院生が集い、研究発表を行う場として、毎年三大学持ち回りで開催している国際会議である。今回の第4回会議は、ソウル大学にて、ナンミン・リー教授を主たるオーガナイザーとして開催され、総計で59名のスピーカーが参加するという、大変に盛大なものとなった。すべて英語で行うという方針のもと、東アジアの三つの大学の間で、まことに実り多い討議が繰り広げられた。東京大学からは、スピーカー以外の参加者も含めて計24名の教員・院生が参加した。これは、本郷のグローバルCOE「死生学」と、駒場のグローバルCOE「UTCP」との、共同活動である。参加者の内訳は、「死生学」から12名、「UTCP」から12名であり、「死生学」からの参加



者は全員が発表した。

会議は、三人の教員によるプレナリー・セッションからはじまった。最初に、北京大学のTianyue Wu教授が聖アウグスティヌスの自由意志論に関する発表を行った。Wu教授は「BESETO哲学会議」の常連で、今回も教授独自の観点から中世哲学研究を展開してくれた。二番目に筆者自身が発表した。筆者は、「Ontology and Ethics of Killed People」と題して、主として殺人の被害者の存在性をどう捉え、そして殺人という犯罪の意味をどう解すべきか、という問題について論じた。「BESETO哲学会議」の発起人の一人でもある駒場の村田純一教授が司会をしてくださった。私の発表は、「一体誰が死ぬのか」といった問いをめぐって今日盛んに展開されている「死のメタフィジックス」に関わる問題を、殺人という事象に適用したものである。要するに、死んでしまったら、その人は消滅するのだから、理論的には死ぬ「誰か」というのは存在しない、よって死んだ人(がいるとしても)は「死」からいかなる利益も害悪も受けることはないのではないかと、という古代のエピクロス以来の問題提起を真摯に受け止めて、殺人という事象をメタフィジックスの観点から洗い直してみようという試みである。筆者は「害グラデーション説」という考え方を提起して、なんとか常識とのすり合わせを試みた。先ほどのWu教授から「害」の概念について質





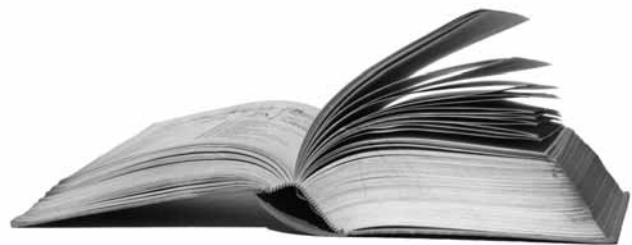
問を受けたり、質疑からも多くを得ることができた。さらに、三番目に、おりよくソウル大学に集中講義に訪れていたロン

ドン大学ユニヴァーシティ・コレッジのPaul Snowden 教授が会議に参加し、自己知識に関する発表をした。教授は、自己知識に関して、言語行為だけでなく、認知状態をも考慮すべきだという趣旨の議論を、現代の論争の文脈に照らして展開した。三大学の会議とはいえ、ときおりこのように別な国からのゲストスピーカも参加し、国際会議らしい装いを帯びているのも「BESETO哲学会議」の一つの特徴である。

その後、いくつかの部屋に分かれて、院生たちのパラレル・セッションが行われた。また、翌1月8日には、午前中に教員によるもう一つのプレナリー・セッションが行われ、駒場の信原幸弘教授が脳科学的知見を踏まえて道徳的判断についての発表を行い、本郷の榊原哲也准教授がフッサールの直観と表現に関する発表を行った。私自身、すべてに参加することはできなかったが、印象に残る発表がたくさんあり、大いに刺激を受けた。全体として、ソウル大学の院生の発表は分析哲学

に関わるものが多く、北京大学の方々の発表は大陸系哲学に関するものが多かった。また、東京大学の院生の発表についていえば、駒場の方々はいわゆる純哲ではない多様なジャンルの主題について発表し、本郷の方々は主として哲学研究室の人たちだったので哲学的な発表を行った。いずれの発表も力のこもったものであり、そして、国際会議の場で英語で研究発表をする、という貴重な体験にもなったのではないかなと思う。

東アジアの三大学がこうした形で学術的協働を続けていくことには、院生の皆さんのトレーニング、三大学間の学術交流、東アジア地域からの学問的発信などの点で、計り知れない意義がある。本「BESETO哲学会議」は、「哲学」といっても広義で捉えているので、実質的に人文学すべてが関わりうる。私たち死生学プロジェクトも、全体をあげてこれに参画していきたい。次回の第5回は北京大学にて、2011年1月8日・9日の二日間にわたって開催される。そして、その次の第6回はよいよ本郷キャンパスで開催する順番である。大いに盛り上げて、東アジアという立ち位置から哲学・人文学を論じることの独自性と意義を、英語を通じて広く世界に向けて発信していきたい。



日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」

竹内 整一（人文社会系研究科 倫理学）

日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」（主催：COE「死生学の展開と組織化」・台湾国立政治大学宗教学大学院）は、2009年10月30日（金）、台湾台北市・国立政治大学にて開催された。今回の研究会議は、「東アジアの死生学」をあらためて主題化するという本COEの活動の一環として、2008年2月に中国・北京市で行った同テーマの研究会議の第二弾として行われた。

日本側からの参加者10名、台湾側の発表者・司会者15名以外に、多くの参加希望者があり抽選を行い80名ほどの研究者や一般参加者もあって、大変な熱気の中で午前9時から会議は始まった。まず、政治大学校長・呉思華氏、文学部長・周惠民氏の挨拶では、日本側参加者に対する歓迎と、台湾での「死生学」「死亡哲学」への高い関心、本会議への期待が述べられ、続いて政治大学宗教学大学院院長・蔡彦仁氏と竹内氏が、開会挨拶で、本会議のテーマ「東アジアの死生学へ」の位置づけをお互いに確認した。午前中は日本側発表者が提題を行った。はじめに、竹内（倫理学）が「日本人の死生観について」というテーマで、中国・台湾思想にはなかなかなじまない「自」の使い分け（「おのずから」と「みずから」）の微妙なあり方と、それに基づいての死生観のあり方の問題点を、おもに本居宣長を中心に論じた。次に、池澤優氏（宗教学）が「現代的宗教性としての生命倫理——中国の事例を題材に」で、現代の中国大陸における生命倫理学の状況を題材として、生と死にかかわる倫理について語ることは不可避免的に一定の宗教性を基盤とせざるを得ないこと、およびその場合に何らかの宗教的な伝統を意識的に利用したり、無意識的に影響されたりする状況が生じていることを論じた。続いて、本学教育学部の金森修氏（科学哲学・本COE事業推進協力者）は「病と死の傍の賢治」と題し、つねに病と死の傍にあった宮沢賢治の作品を通して、しかしなお、〈一人称の死〉とは、広大な自然世界の小さな一片にすぎないかのように軽くなげやりに語られていること、それは〈二人称の死〉の重さと対照であると論じた。

昼休みを挟んで台湾側4名の提題があった。現役の道士でもある中央研究院中国文哲研究所の李豊楙氏は「注連と解除：道教抜度儀中の非常死亡観」というテーマで、台湾・香港に残っている、非業の死を遂げた死者に対する儀式とその思想背景を詳しく紹介した。続いて、政治大学宗教学研究所の謝世維氏

が「生死と儀礼：中世の道教経典における煉度の観念と死亡の救済」で、中世の道教経典に見られる、死後救済の観念と儀式の変遷について、特に靈魂と肉体の関係に注目しながら報告した。次に、政治大学宗教学研究所の蔡彦仁氏が、「台湾における大衆の死後観の分析——「台湾における宗教体験の比較研究」の2009年の試験調査をもとに」で、氏が参画している宗教体験に関するプロジェクトの一環として行ったアンケート調査の結果をもとに、現在の台湾の死後観の変化・現状の具体的で詳細な報告がなされた。最後に日本思想の研究者である徐翔生氏（政治大学日文系）が、「日中死生観の相違——心中をめぐる」で、男女の心中を題材にした日中それぞれの文学作品を比較し、両者の死生観の相違とその背景を分析した。

総合討論においては、以上の各提題をふまえて、とくに日本と台湾の死生観の異同やその思想背景、近代化での変容、いま東アジアの死生学の問うことの可能性、などについて議論が交わされ、予定時間を大幅に過ぎ、18:30に閉会となった。

今回の研究会議を通して、台湾においては、死生学研究がかなり盛んに進められていることがわかり、さまざまな切り口から、北京とはまたかなり違った議論をできたことが大きな成果であった。この会議については、来年度前半に報告論集として出版予定である。



書評

島田裕巳著 『葬式は、要らない』

中西 俊英（日本学術振興会特別研究員 インド哲学・仏教学）

社会の変化にともない、近年、葬式のあり方は大きく変わりつつある。本書は、葬式が今どう変化しているのかを紹介し、葬式がどのような意味をもつものなのかを、私たちに考えさせてくれる。いわば、現代人の葬式に対するリテラシー向上の書である。

「葬式は贅沢である。」

著者の主張は一貫してこの点にある。著者は、死者とのけじめをつけるものとして葬式の必要性を認めつつも、あくまでも葬式は贅沢であるとし、葬式無要論の立場から考察をおこなう。そして、葬式が贅沢であるという理由に関して、(1)歴史的な側面、(2)社会的な側面、(3)費用の側面などから多面的にアプローチしてゆく。

(1)歴史的な側面としては、葬式と仏教とが結びついたことが大きい。仏教伝来以前の古代において、死者の赴く世界は現世と連続したものとして捉えられていた。しかし、仏教が伝来し、他界世界や念仏行による往生が伝えられ、仏教と死が結びつき、大衆化する。さらに、禅宗によって葬式の方法が伝えられ、儀式として成立し、社会全体へと拡大し、一般化したのである。この仏教式の葬式では、戒名や祭壇などが、費用増大の大きな要因となる。

(2)社会的な側面としては、「世間体」の存在が挙げられる。著者は、日本に特有の「社会」とは異なる「世間」に注目し、たんに人の集まりを意味するだけでなく、その世間に属する人たちのところの中にある社会的規範の面を強調したものが「世間体」であるとする。そして、布施や香典の相場などのように、この世間体が顕著にあらわれるのが葬式であり、その贅沢さを助長する。

(3)費用の側面としては、戒名の存在が挙げられる。著者は、戒名が定着した要因として、日本独自の「襲名」の文化を指摘する。つまり、その人間の身分や境遇が変われば名前も改めるべきという文化である。この襲名という文化を背景に、江戸期の寺請制度の導入などを経て、仏教には本来存在しないはずの戒名が定着した。

また、檀家も贅沢のひとつであるという著者の見解は、斬新な視点である。檀家になることは、自分の家の死者を弔ってもらう檀那寺を持

つことで、いわば供養の委託であり、古くは平安貴族が味わっていたのに近い境遇である。檀家の側はこれを自覚すべきであり、贅沢を享受しながらも、その自覚が十分でないという。

その他、本書は、葬式が贅沢である理由のみならず、葬式様式の変化にも触れ、新たな視座や選択肢を与えてくれる。

現代社会では、核家族化の進行にともなって「家」の重要性が低下し、家の葬式から個人の葬式へと移行しつつある。この流れの中、昨今、直葬が増加し、葬式は簡略化の一途をたどっている。そして、今後は葬式を必要としない方向へ社会はすすんでいくと、著者は推測する。また、葬式をしない選択を提示し、葬式に贅沢にお金をかけるよりも、具体的に他の何かを残すべきであるという。

研究に携わるかたわら、僧侶としての活動も行う私としては、特に悲しみをケアする場としての機能から、葬式は必要であると考えている。もちろん葬式に関するリテラシーの欠如は、仏教界の責任は言うまでもないが、死に関する教育が不足していることも挙げられる。仏教界は、それを真摯に受け止め、葬式とは何かを檀家に明確に説明するとともに、葬式という場を、生死に関してともに考える場として積極的に活用すべきであろう。

また、本書は、葬式の必要性に関して、贅沢であるとの理由からそのあり方を問うが、遺族の側に立った、感情の面への配慮が欠けている。大事な人を無くした悲しみ、それはなかなか拭い去ることの出来ないものであるが、喪主や遺族として煩雑な葬式の準備に追われる中で、少しは解放されるという意見もよく耳にする。

確かに葬式は、必要以上に贅沢なものであるのかもしれない。しかし、本書を通じて、葬式の本質をよく見極め、余分なものを捨象したならば、たとえば、けじめをつける場、悲しみをケアする場として、本当の意味での今後の葬式のあり方が浮かび上がってくる。その意味において、本書は、葬式に関心のある人だけでなく、葬式をこれから実際に行おうとする人にとっても、新しいかたちのよき手ほどきの書となるであろう。

(幻冬舎新書、2010年1月30日刊行)



書籍紹介

『死生学研究』 最新号

研究機関誌『死生学研究』第13号を発行いたしました。内容の詳細は下記の通りです。

『死生学研究』第13号

・高橋都

ドキュメンタリー映画を通して見る死生学

・柳原良江

メディアの中の代理懐胎者像
大衆雑誌の言説分析から

ワークショップ「戦争と戦没者をめぐる死生学」

・加藤 陽子

戦死と遺族 死に場所を教えられなかった国とその戦後

・エリック・シッケタンツ

現代中国における清明節の復活
共産党政権の文化政策における
祖先祭祀の位置づけについての考察

・金光来

中世キリスト教靈魂論の朝鮮朱子学的変容
イエズス会の適応主義と星湖の心性論

欧文レジュメ

研究機関誌『死生学研究』規約
編集後記

・みつまつまこと

学者と講釈師のあいだ
平田篤胤『靈能真柱』における安心論の射程

・西塚俊太

人生の悲哀と「永遠の今」の歴史論の交点
西田幾多郎の死生観をめぐって

・荒井裕樹

文学が描いた優生手術
ハンセン病患者は「断種」をいかに描いてきたか？



(2010年3月15日発行)

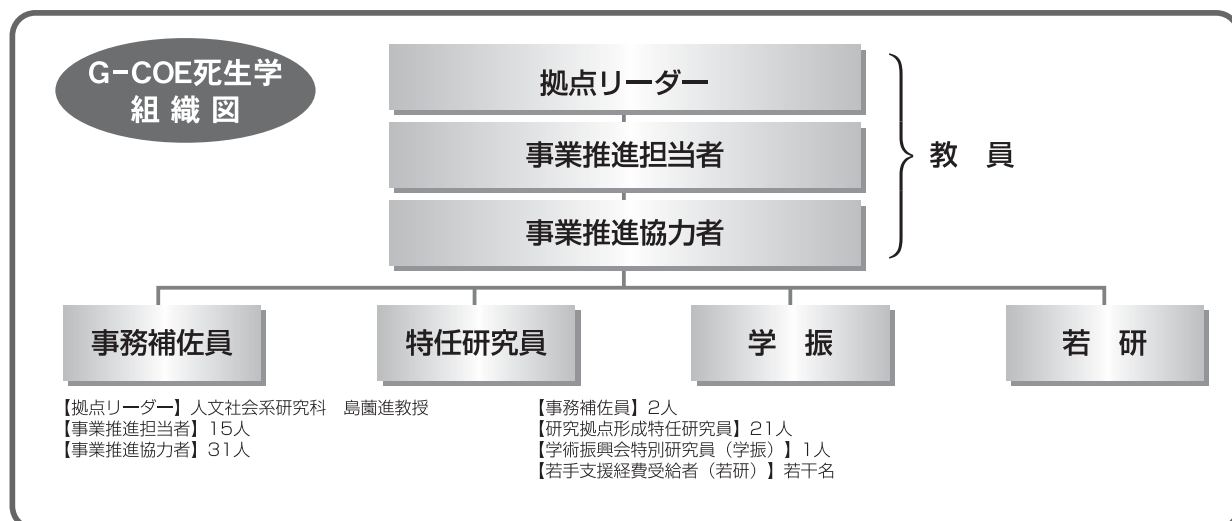


東京大学 グローバルCOEプログラム

「死生学の展開と組織化」 組織図

事業推進担当者（計15名）

島 蘭	進（しまその・すすむ）	宗教学宗教史学
秋 山	聰（あきやま・あきら）	美術史学
安 藤	宏（あんどう・ひろし）	日本文学
池 澤	優（いけざわ・まさる）	宗教学宗教史学
一ノ瀬	正 樹（いちのせ・まさき）	哲学
大 稔	哲 也（おおとし・てつや）	東洋史学
上別府	圭 子（かみべつぷ・きよこ）	医学系研究科
熊 野	純 彦（くまの・すみひこ）	倫理学
佐 藤	健 二（さとう・けんじ）	社会学
清 水	哲 郎（しみず・てつろう）	上廣死生学講座教授
下 田	正 弘（しもだ・まさひろ）	インド哲学仏教学仏教学
鈴 木	泉（すすき・いずみ）	哲学
竹 内	整 一（たけうち・せいいち）	倫理学
中 川	恵 一（なかがわ・けいいち）	医学系研究科
山 崎	浩 司（やまさき・ひろし）	上廣死生学講座講師



目 次

— CONTENTS —

●巻頭エッセイ●

フォーレの《レクイエム》と「天国」の表象

渡辺 裕 2

救われた命

上別府圭子 3

●イベント報告●

第15回日本臨床死生学会大会 テーマ：臨床現場で生きる／活かす死生学

清水 哲郎 4

公開講演会：青木新門氏「いのちのバトンタッチ——映画『おくりびと』によせて」

島 蘭 進 5

臨床死生学会講演と《医療・介護従事者のための死生学》セミナー

ライアン・ワルド／松本 聡子／伊藤由希子／山崎 浩司 6

シンポジウム1 遺された人々の思いに寄り添って

山崎 浩司 8

シンポジウム2 「ケア現場における喪失と臨床倫理」

竹内 整一 9

The 4th BESETO Conference of Philosophy

一ノ瀬正樹 10

日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」

竹内 整一 12

●若手研究者から●

書評 島田裕巳著『葬式は、要らない』

中西 俊英 13

●書籍紹介●

『死生学研究』

14

●組織図●



死生学 DALs ニュースレター No.25

平成22年3月24日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島 蘭 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>